

新年おめでとうございます。

こうしてみなさんの顔を見ると、吸い込まれるような真っ直ぐな視線を感じます。

「『式』と名がつく行事を大切にできる学校にしよう。そういう西高生になろう。」

今、この体育館に流れる、『凜』とした空気。

これこそが、清水西高校の誇り（プライド）です。

清水西高校で良かった。 西高生で良かった。

そうした思いを抱けるようになるのは、

目には 見えないものを大切にする。大切にしよう。

そう、一人一人が強く思うことがなければ、勝手にそう成ってくれるわけではありません。

『為せば成る。』 そうです。『為すことで、成るのです。』

みんなて共有する時間を大切にしよう。 みんなて使う場所をキレイに保とう。

自分たちの力で、キチンと並ぶことが出来る。

自然と顔が上がる。 背筋が伸びる。

『あたりまえ』のレベルは、上げることも、下げることもできる。

『あたりまえ』を大切にできる、『あたりまえ』のレベルが高い学校でいきましょう。

新しい年を迎えたみなさんに、一つ言葉を贈ります。

大正・昭和の時代の哲学者に、安岡正篤（まさひろ）さんという方がいます。

安岡さんは、陽明学（儒教の一派で、「心即理（心こそが道理）」、「知行合一（知識と行動は一致）」、「致良知（本来持っている良知を徹底させる）」ということを主要な思想としていて、要するに、知識だけでなく実践を重んじる「行動哲学」や 人間学の権威として知られ、政財界のリーダーの精神的支柱（いわば御意見番）として、指導的な立場にあった人物といわれています。

今の『令和』という元号の前、『平成』の元号の考案者としても知られる方です。

先生方にも、以前『校長だより Vol.4』で御紹介しましたが、ある知人からの勧めで、それ以来、常にカバンの中に入れている・・・、というあの方のことです。

『未見(みけん)の我』 これは、「まだ自分でも気づいていない、可能性に満ちた自分」という意味です。

今の社会は、明日のことが誰にも分らないほど、激しく動いています。

しかし、社会がどうであろうと、みなさんの内側には、まだ目覚めていない『最高の自分』が眠っています。

私はこれまで、『式』と名の付く場面で、『決意と決断の違い』について伝えてきました。

『ここぞ』という時に、容易(たやす)い方向に流されてしまわぬように、

普段から、『ああなったら、こうしよう。そして時には、この場合は、あえてやめておこう。』

そんな風に、『思い』を固めていくのが決意。

『他(た)の選択肢を断ち切り、一歩踏み出す』のが、決断です。

三学期は短いですが、最も大事な時間です。

『失敗を恐れて動かない自分』を捨てる。『どうせ無理だろう。』という言葉を決断。

そう決断した瞬間に、みなさんの前に 『未見の我』が現れます。

私は、先生方と、『同じ星を見て歩いていきましょう。』という言葉を決断にしています。

みなさんが、『未見の我』を探してチャレンジするなら、私たちは全力で、その過程で起こる『失敗』を支えます。

そして、その先に手にする『成功』を共に喜びます。

三学期が終わる時、ここにいる全員が、「自分はここまでやれるんだ!」

そういう新しい自分に出会えていることを期待しています。

清水西高のプライドは、自分たちが作る。西高のプライドは、自分たちが高める。

「やってやる!」 力強い気持ちで三学期を全力で前に進んでいきましょう。

自分自身の『物語』を、自分の努力で創っていきましょう。

西高の物語を、ここにいるみなさんで創っていきましょう。

令和7年度 三学期始業式 校長訓辞とします。